

2025年7月16日（水） 聖書研究祈祷会

赤井博夫

タイトル『義の道』

聖書箇所：詩篇23篇

賛美：新聖歌 206番 「飼い主わが主よ」

本日のタイトルを『義の道』とさせていただきます。最初は『主は私の羊飼い』としていましたが、3節の『主はわたしのたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導かれます。』に注目したからです。

詩篇23篇を愛唱聖句にしておられる方が、柏原教会90周年記念誌の見ますと、7名おられます。1割以上の方が愛唱聖句にしておられるのです。中には証の時に語んじられた方もおられます。詩篇150篇のうち約70篇がダビデの作と言われています。中でもこの23篇は、なぜこんなに愛されるのでしょうか。1節から4節の前半と5節から6節の後半に分けてみていきたいと思います。

まず1節の『主は私の羊飼い。私には乏しいことはありません』ですが、ダビデは神様を羊飼い、自分を羊にたとえています。ダビデはこの詩を晩年に作ったと言われています。ですからダビデは今までの人生を振り返って「主は私の羊飼いであった。私には乏しいことがなかった」と言っているのです。この23篇はダビデの生涯の凝縮と言えるのではないのでしょうか。

ここでダビデの生涯を少し見ておきたいと思います。

エッサイの8人兄弟の末っ子で、幼い頃から父親に「羊飼い」として育てられ、また兄たちにもいわば「こき使われて」育ちました。ダビデの人生の基礎はこの羊飼いの仕事を通して培われたと言っても過言ではないでしょう。

やがてダビデは、少年時代に戦場で戦う兄たちの慰問に父の命令で行くことになります。そこでペリシテ人の大男に出会うわけです。皆がこの大男との戦いに尻込みする中で、ダビデは武具も付けずに5つの石を持って挑みます。ダビデの放った石がゴリアテの額に命中し、ぱったりと大男は倒れます。サウロ王はゴリアテを倒した者を息子とすると言っていました。ダビデはサウロ王に息子として迎えられます。家も税金を免除されるなどの優遇を受けます。ここでダビデは軍事や政治の帝王学を学ぶことになりますが、時には暇をもらってベツレヘムの家に帰っては羊飼いをしていました。

ダビデは基本的に羊飼いの仕事が好きだったのではないのでしょうか。羊飼いは満天の夜空を眺めながら、昼は草や水を求めて移動し、いわば自然の中で天地万物を造られた方を覚える生活です。ダビデにとっては英気を養う時ではなかったのでしょうか。

しかし、やがてダビデの才覚と名声を恐れたサウロはダビデを殺そうとします。ダビデはユダの荒野を逃げ回るわけです。

私は2022年1月、ガザとイスラエルの戦争が始まる9カ月前にイスラエル旅行の機会を得ました。イスラエルの6割は砂漠です。『行けども行けどもただ砂原、道なき道を一人歩む…』というさんびがありますが、バスから見える車窓の風景はまさに荒野の連続でした。イエス様はこのような地で33年間生きて、死んで、よみがえって下さったのかという感慨が、イスラエルに対する最初の印象でした。

死海近くのエンゲディ国立公園を30～40分登りますと、「ダビデの滝」があります。逃げ惑うダビデが

神様にこの滝に導かれ、10m 足らずの小さな滝ですが、ダビデにとっては憩いの時を過ごせたのだと想像しました。又辺りには荒野の中に自然の洞穴があちこちにあり、ダビデはこの洞穴をあちこち逃げ回ったんだろうと想像しました。

私が注目したのは 3 節です。『わたしのたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導かれます。』という箇所です。

ダビデはサウルが死んで、やがて 30 歳でユダの王になり 7 年半王位につきます。その後第 2 代のイスラエルの王になり、33 年の長きにわたり王位について、70 歳で引退し 71 歳で亡くなります。その間バテシバとの大きな過ちがありました。泥沼であえぎます。32 篇 4 節に『骨の髄さえ 夏の日照りで渴き切ったからです』とあります。骨髓は赤血球、白血球、血小板をつくるところです。ここが枯れると言うことは死を意味します。まさに『死の影の谷』に放り込まれたのです。

しかし、ダビデが自分の口で、言葉で罪を言いあらわし、神様に悔い改めた時、神様は再びダビデを探し出して『死の影の谷』から救い出して下さったのです。

そればかりでなく陽の当たる道、すなわち『義の道』へと導いて下さったのです。

そのシーンがこの 3 節とオーバーラップするわけです。『私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに私を義の道に導かれます。』

もう一つマタイによる福音書 6 章で、イエス様は、弟子たちに将来に対する不安があるのを見透かされて『空の鳥を見なさい。野の花を見なさい』と自然に目を向けさせられて、『まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えてあたえられます。』（マタイ 6：33）と言われ、衣食住をはじめ必要なものは備えられると約束されたです。

一見シーンが違ってくるように見えますが、ダビデも功成り名を遂げたあと、わが思い、欲望、驕り、高ぶり、油断が生じ、第一にするべきお方を見失ったために、大きな罪を犯すことになったわけです。しかし悔い改めることによって再び『義の道』に戻していただきました。

ですから、『たとえ 死の谷を歩むとしても 私はわざわざいを恐れませんが、あなたが ともにおられますから。』と大胆にも言えるわけです。

『あなたのむちとあなたの杖 それが私の慰めです。』このむちはわたしを罪に陥れるものから守って下さるものであり、杖はそこから引き上げて下さるものであります。

後半の 5 節 6 節を見たいと思います。

『私の敵をよそに あなたは私の前に食卓を整え 私の杯は あふれています』この敵とは、羊飼いのためには羊の命をねらう狼、獅子などです。私たちの最終的な敵は死です。しかし『私のいのちの日の限り いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう。』そればかりではなく『私はいつまでも 主の家に住みます。』とダビデは、信仰、確信、希望を高らかに宣言しています。死んでも神の家族として迎え入れられるというダビデの確信、希望です。だから生くるも死ぬるも、ダビデにとっては豊かな食卓であり、あふれる杯なのであります。

一度死んだダビデのたましいを生き返らせて下さったのは神様です。私たちもかつては神に背を向けて自分勝手な道を歩んでいました。

悔いし砕けた魂で方向転換した時、神様は闇の中から引き上げ『義の道』を歩む者として下さいました。

私たちもこの喜びに与った者として、この喜びを独り占めにしないで、家族や友人・知人や地域の方々に分かち合っていく者にさせていただきましょう。